

# 三支縁起説の成立

— upadhi の用例を通して —

唐 井 隆 徳

〔抄 録〕

本稿は、初期經典における三支縁起説がどのように展開し、成立したのかという点を、upadhi の用例を通して、韻文資料を中心に考察する。結論として、「苦←所有 (upadhi)」の関係がまずあり、苦の滅を説くために渴愛 (taṇhā) を導入し、縁起説の体裁を整えて三支縁起説が成立したのではないかという仮説を示した。

キーワード 三支縁起説、所有、upadhi、upādāna

## 0. 問題の所在

初期經典における縁起説の展開は、支分の少ないものから多いものへと順次、支分が付加されたと考えるのが一般的であると言えよう<sup>(1)</sup>。その見地からすれば、本稿で考察する三支縁起説は、初期經典における縁起説の中でも、かなり早くに構築されたことになる。しかし、支分数が少ないという理由のみで、三支縁起説の成立の古さを論じることではできないので、初期經典の中でも最古と言われる *Suttanipāta* の第四章 *Aṭṭhakavagga*、第五章 *Pārāyanavagga* を最古層とし、その他の韻文資料を古層とし、その展開を考慮にいれながらその成立過程を考察していく。その際、三支縁起説に見られる upadhi という用語の意味を把握することが肝要であるため、初めにその用例を見ていき、upadhi が具体的にどのような意味を持つ用語なのかを明らかにしていきたい。その上で、三支縁起説の成立過程について、一つの仮説を提供しようと思う。

## 1. upadhi の用例

初期經典における upadhi という用語<sup>(2)</sup>は、訳者によって様々な訳が与えられており<sup>(3)</sup>、具体的に何を表している用語なのか、明確ではない。そこで、先行研究<sup>(4)</sup>を参考にすれば、upadhi には大別して、二つの意味が与えられている。一つは、upadhi が所有物を意味するもの、もう一つは upadhi が執着を意味するものである。upadhi は upa-√dhā からなる名詞であり、接頭辞と語根の意味を考慮して訳せば、「近くに置く」という意味である。このことから「近くに置くもの」が「所有物」、「近くに置く作用」が所有する作用を表しており、実際に対

象物を所有するという意味もあれば、所有しようとする所有欲を意味しているとも考えられるが、ここでは便宜上、「所有」と訳すことにする。本節ではこの二つの視点から可能な限り訳し分け、初期經典における upadhi の用例を見ていく。

### 1. 1. 「所有物」を意味する upadhi

まず、韻文資料における所有物を意味する upadhi の用例を見る。

SN. 1, 2-2(Vol. I p. 6. 9-11):

Socati puttehi puttimā gomiko gohi tath-eva socati  
upadhihi narassa socanā na hi socati yo nirupadhīti.

子を持つ者は子達によって憂える。同様に牛飼いは牛達によって憂える。

諸々の所有物（upadhi）<sup>(5)</sup>によって人には憂いがある。実に所有物を離れた者は憂えない。

この資料では、upadhi が所有物を表している。先述したように、upadhi は「置く（√dhā）」という動詞に接頭辞 upa- が付加されており、「近くに置く」という意味であり、「置く」主体が変われば、その所有物の内容もそれに準じて変わってくると考えられる。この場合、子を持つ者にとっては子であり、牛飼いにとっては牛である。子や家畜は、他の韻文資料で出家する時に、捨てるものとされている<sup>(6)</sup>ことから、ここでの upadhi は出家者が捨てるべき在家者の所有物<sup>(7)</sup>と考えることができる。このような所有物を表す用例は、古層のジャイナ教聖典にも見られる<sup>(8)</sup>。次の資料は所有物の内容が明確ではないが、upadhi を所有物と訳すべき用例である。

Ud. 7, 10 (p. 79. 24-26):

mohasambandhano loko, bhabbarūpova dissati,  
upadhibandhano bālo, tamasā parivārito,  
sassatoriva<sup>(9)</sup> khāyati, passato natthi kiñcananti

愚かさに縛られた世間の人は、立派そうに見える。

所有物（upadhi）に縛られた愚か者は、闇に覆われている。

〔彼には所有物が〕常住のように思える。〔正しく〕見ている者には何ものも存在しない。

この資料に説かれる upadhi を煩惱や執着と訳してしまうと、ef 句とのつながりが明確にならない。次の資料は、ウルヴェーラ・カッサパに対して世尊が火による供犠（aggihutta）を捨てた理由を質問した時のカッサパの返答に相当する部分である。

Vin. 1, 22 (Vol. I p. 36. 18-21):

rūpe ca sadde ca atho rase ca kāmitthiyo cābhivadanti yaññā

etaṃ malan ti upadhīsu ñatvā, tasmā na yiṭṭhe na hute arañjin

諸々の祭祀は、諸々の物質、諸々の声、諸々の味、欲望の対象や女に関して言う。

諸々の所有物 (upadhi) に対してこれは垢であると知って、それ故、私は供犠や供養に染まらなかった。

ここから、祭祀は所有物である欲望の対象に焦点を当てていることが分かる<sup>(10)</sup>。さらに、upadhi が身体の意味に近い資料を示す。

It. 77(p. 69. 10-13):

Kāyañca bhindantaṃ ñatvā viññāṇaṃ ca virāgaṇaṃ

upadhīsu bhayaṃ disvā jātimaraṇaṃ-ajjhagā

肉体が壊れること、識が衰えることを知って、

諸々の所有物 (upadhi) に対して恐れを見て、生死を理解した。

この資料における upadhi は ab 句から考えて、肉体や識を伴う身体を所有物と見ている。また、この偈に対する散文箇所には sabbe upadhī aniccā dukkhā vipariṇāmadhammā (一切の所有物 (upadhi) は無常であり、苦であり、変化する性質を有している) と述べられており、aniccā dukkhā vipariṇāmadhammā という表現は一般的に五蘊や六処に対して用いられている<sup>(11)</sup>ことから、散文箇所における upadhi は五蘊や六処の構成要素を表していると考えられる。

次に、散文資料における所有物を意味する upadhi の用例を見る。

MN. 26(Vol. I pp. 161. 35-162. 10):

Katamā ca bhikkhave anariyā pariyesanā: Idha bhikkhave ekacco attanā jātidhammo samāno jātidhammañ-ñeva pariyesati, attanā jarādhhammo samāno jarādhhammañ-ñeva pariyesati, attanā byādhidhammo … attanā maraṇadhammo … attanā sokadhammo … attanā saṅkilesadhammo samāno saṅkilesadhammañ-ñeva pariyesati.

Kiñ ca bhikkhave jātidhammaṃ vadetha: Puttabhariyaṃ bhikkhave jātidhammaṃ, dāsīdāsaṃ jātidhammaṃ, ajeḷakaṃ jātidhammaṃ, kukkuṭasūkaraṃ jātidhammaṃ, hatthigavāssaṃ jātidhammaṃ, jātārūparajataṃ jātidhammaṃ.

Jātidhammā h' ete bhikkhave upadhayo, etthāyaṃ gathito mucchito ajjhopanno

attanā jātidhammo samāno jātidhammañ-ñeva pariyesati.

比丘たちよ、何が聖者でない者の求めであるか。比丘たちよ、ここに、ある者は自ら生まれの状態である時、生まれの状態を求め、自ら老いの状態である時、老いの状態を求め、自ら病の状態…自ら死の状態…自ら憂いの状態…自ら汚れの状態である時、汚れの状態を求める。

比丘たちよ、何を生まれの状態と言うのか。比丘たちよ、子と妻は生まれの状態である。奴隷女と奴隷男は生まれの状態である。山羊と羊は生まれの状態である。鶏と豚は生まれの状態である。象と牛と馬と牝馬は生まれの状態である。金と銀は生まれの状態である。比丘たちよ、これらの諸々の生まれの状態は諸々の所有物（upadhi）である。ここで彼は縛られ、夢中になり、魅惑され、自ら生まれの状態である時、生まれの状態を求める。

この資料では、子や妻、奴隷、家畜、金と銀が所有物（upadhi）としてまとめられている。聖者でない者の求め（anariyā pariyesanā）とあるように、upadhi が世俗的な所有物の意味で用いられていることが分かる。

以上、所有物を意味する upadhi の用例<sup>(12)</sup>を見てきた。身体を意味すると思われる upadhi も見られるが、その用例の多くが、在家者やバラモンが所有するような世俗的な所有物を upadhi で表現していることが分かる。

## 1. 2. 「所有」を意味する upadhi

次に、韻文資料における所有を意味する upadhi の用例を見る。

Ud. 3, 10(p. 33. 11-12):

Upadhiñ hi paṭicca dukkham idaṃ sambhoti<sup>(13)</sup>

Sabbūpādānakkhayā natthi dukkhassa sambhavo

所有（upadhi）によってこの苦が生じる。

一切の執着（upādāna）の滅尽により、苦の生起はない。

この資料は upadhi と upādāna が類似していることを表している。upadhi と upādāna は語根が異なり、意味も異なると考えられ、なぜ別の用語を使用したのか考察する必要があるが、ここでは煩雑となることを避けて、三支縁起説の成立について論じる際に合わせて考察する。

次に、upadhi を滅した状態が覚りを表しており、所有物と訳すよりも、所有と訳す方がよりふさわしいと思われる用例があり、以下に示す。

- kāyena amataṃ dhātuṃ phassayitvā nirūpadhiṃ（身体を伴って所有を離れた不死の世

界に達して) (It. 51, 73)

- vippamuttaṃ nirupadhiṃ (解脱し、所有を離れた) (Thī. 320, 334)
- vimutto upadhikkhaye (所有の滅尽において、解脱した者) (Sn. 992 It. 112)
- sītibhūtaṃ nirūpadhiṃ (清涼となり、所有を離れた) (Sn. 642 Dhṃ. 418)

次に、散文資料における所有を意味する upadhi の用例を見る。これに関して、宮本正尊 [1975: p. 724] が、「…散文部分では約三十個所にこの語が現れるが、そのほぼ半数が「一切行の寂止、一切ウパディの捨離 (sabbūpadhi-paṭinissagga)、渴愛の滅尽、離貪、滅、涅槃」という定型的表現をとっている…」と述べるようにこの定型句<sup>(14)</sup>で用いられることがほとんどである。この場合の sabbūpadhi-paṭinissagga は涅槃と同義であることから、upadhi は所有を表していると考えてよいのではないか。以下に定型句以外の用例を示す。

AN. 6, 56(Vol. III p. 382, 10-16):

Idh' Ānanda bhikkhuno pañcahi orambhāgiyehi saṃyojanehi cittaṃ vimuttaṃ hoti, anuttare ca kho upadhisamkhaye cittaṃ avimuttaṃ hoti. So tamhi samaye maraṇakāle labhati tathāgataṃ dassanāya. Tassa Tathāgato dhammaṃ deseti ādikalyāṇaṃ majjhe kalyāṇaṃ … pe … brahmacariyaṃ pakāseti. Tassa taṃ dhammadesanaṃ sutvā anuttare kho upadhisamkhaye cittaṃ vimuccati.

アーナンダよ、ここに比丘の心が五下分結から脱した。しかし、この上ない所有 (upadhi) の滅尽において心が解脱していない。彼は、死ぬ時に如来を見ることを得る。如来は彼のために初め善く、中において善く、…教えを示す。…清浄行を明らかにする。その教えの説示を聞いて、彼の心はこの上ない所有の滅尽において解脱した。

比丘が五下分結から脱していることから、不還果であることは分かる。しかし、upadhi をまだ滅尽していない状態であり、如来から教えを聞いて upadhi を滅尽して解脱する。このことから、upadhi を滅尽した状態が阿羅漢果であるかどうかは分からないが、不還果よりも上の段階であることは分かる。「無上愛盡解脱」<sup>(15)</sup>と漢訳されていることから、ここでの upadhi は所有であると言える。

以上、所有を意味する upadhi の用例を見てきた。基本的に、所有を意味する upadhi を滅した状態が覚りを表しており、そのことが定型句に顕著に表れている。また、定型句以外に、不還果より上の段階に進むために upadhi を滅することが説かれており、このような具体的な説明は韻文資料に見られなかった。

## 2. 三支縁起説の成立

前節1.では、三支縁起説の支分である upadhi について、その用法を確認した。本節では、三支縁起説の成立過程を考察し、その意味を把握するために最古層から古層へと資料を追っていき、一つの仮説を提供する。

### 2. 1. 最古層における苦の原因

縁起説の発端として「苦の原因は何か」という根本的な問題があったように思う。三支縁起説では、苦の原因として前節で考察した upadhi を立てるが、最古層では苦の原因として何を立てるのかについて考察する。

Sn. 805

socanti janā mamāyite, na hi santi niccā pariggahā,  
vinābhāvasantam ev' idaṃ, iti disvā nāgāram āvase

人々は我がものとするために憂える。なぜなら、持ち物は常住でないからである。

これはただ別離してあるものと見て、家に住してはならない。

この資料では、「我がものとする→憂える」という関係が表れており、その理由は我がものとする対象物が無常であるからと説かれる。またSn. 809では、「我がものとした対象を貪る→憂い（soka）、悲しみ（parideva）を捨てない」と説かれており、上記の用例と類似している。さらにSn. 769-770では、田、土地、黄金など世俗的な対象物を求める者には苦（dukkha）が従うと説かれ、我がものとする対象がより具体的に表現されている。これらの用例は苦の生起について説かれている。

ここまで、憂いや悲しみなどの苦で、生老死に関する用例を示していないが、Sn. の第四章には生老死に関する苦がほとんど説かれていない。一方、Sn. の第五章では、生老死に関する苦が説かれる。その中で、縁起説で説かれる苦に最も類似している用例を示す。

Sn. 1056

evaṃvihārī sato appamatto bhikkhu caraṃ hitvā mamāyitāni  
jātijaraṃ sokapariddavaṇ ca idh' eva vidvā pajaheyya dukkhaṃ

このように住し、自覚し、怠けない比丘は遊行しつつ、我がものとするを捨て、

この世で智者として、生と老、憂いと悲しみという苦を捨てるだろう。

この資料では、「我がものとするを捨てる→生と老、憂いと悲しみという苦を捨てる」

という関係が表れており、苦の滅について説かれている。また、無所有 (akiñcana) や無執着 (anādāna) が老死の滅尽を表す資料<sup>(16)</sup>もある。

表現は異なるが、最古層で説かれる苦の原因として、ある対象物を我がものとする事 (mamāyita) や、執着 (ādāna) などが挙げられていると言える。また、苦とは憂いや悲しみという心に関する苦と、生や老や死という肉体に関する苦が見られる。散文資料に説かれる縁起説の苦は「老 (jarā)、死 (maraṇa)、憂い (soka)、悲しみ (parideva)、苦しみ (dukkha)、落胆 (domanassa)、悩み (upāyāsa)」とされるが、最古層では老と死だけでなく、生も苦として捉えられている。

ここまで、最古層における苦の原因を概観したが、三支縁起説における苦の原因である upadhi も、最古層で苦の原因と考えられているので以下に示す。

Sn. 1050

“dukkhassa ve maṃ pabhavaṃ apucchasi, Mettagū ti Bhagavā  
taṃ te pavakkhāmi yathā pajānaṃ:

upadhīnidānā pabhavanti dukkhā, ye keci lokasmiṃ anekarūpā

メッタグーよと世尊は〔言った。〕あなたは私に苦の生起を問うた。

私は知っている通りに、それをあなたに話すだろう。

世間におけるいかなる多くの苦も、それは所有 (upadhi)<sup>(17)</sup>を因として生じる。

この資料は、苦の原因として所有 (upadhi) を立てており、三支縁起説に説かれる苦の原因と同じ単語である。また、原因を表す単語である nidāna を用いており<sup>(18)</sup>、他の用例に比べて、苦の原因ということが一層強調されていると言える。最古層では、nidāna を用いて表現される苦の原因は upadhi のみである。upadhi の意味は、①所有物②所有の二つを考慮しなければならないことは既に述べたが、この場合、最古層で説かれる苦の原因のほとんどが、ある対象物を我がものとしたり、執着することと考えられていることから、この用例での upadhi は②の所有を表していると思ふべきである。

以上、最古層における苦の原因を見てきた。最古層では苦の原因として、ある対象物を我がものとしたり、執着したりすることを挙げている。さらに、散文資料に説かれる三支縁起説で苦の原因として設定される upadhi も、nidāna という単語を用い、苦の原因として扱われており、各支縁起説成立以前に既に「苦←所有 (upadhi)」という関係があったことが推察される。尚、その関係は苦の生起についてのみであり、苦の滅に関して説かれていない。



## 2. 2. 古層における苦の原因

前項では、最古層における苦の原因を見た。本項では古層における苦の原因を考察する。Sn.の第三章に説かれる「二種の観察」<sup>(19)</sup>では、覚りに導くための二種の観察方法として、苦の生起と滅を観察することが述べられている。そこでは、十二支縁起説で説かれる支分と同じものが多く見られ、連鎖的に説かれず、苦との、いわば二支の関係で説かれている。苦の原因のみ示すと、「苦←所有（upadhi）」（Sn. 728）、「生死輪廻←無明」（Sn. 729）、「苦←行」（Sn. 731）、「苦←識」（Sn. 734）、「苦←渴愛」（Sn. 741）、「苦←有←取（upādāna）」（Sn. 742）、「死苦←生」（Sn. 742）、「苦←企て（ārambha）」（Sn. 744）、「苦←食（āhāra）」（Sn. 747）、「苦←動揺（iñjita）」（Sn. 750）が挙げられ<sup>(20)</sup>、最古層と比べると明らかに苦の原因に多様性が生まれている。また、「二種の観察」において苦の滅を観察する用例は、苦の生起を観察する用例に比べると少ない<sup>(21)</sup>。最古層の資料で検討したSn. 1050の「苦←所有（upadhi）」を表す資料も引き続き現れるが、最古層と同じように「苦の滅←所有の滅」を表すことはない。

しかし、古層で苦の生起に力点が置かれているといっても、Ud. 8, 8 (p. 92) で説かれる「愛すべきもの（piya）→苦、愛すべきものの滅→苦の滅」のように、最古層には見られなかった「A→苦、Aの滅→苦の滅」という苦の生起と滅を共に兼ね備えた用例<sup>(22)</sup>も、「二種の観察」を中心に古層から徐々に見られるようになった。そのことから、各支縁起説成立以前に、二支の縁起説と呼べるものは古層から存在すると言える。また、上述した「苦←有←取」のように「苦←A←B」という三つの連鎖からなる縁起説<sup>(23)</sup>も古層から見られる。

以上の最古層から古層への流れをふまえ、最古層と古層で述べられた「苦←所有」が、他にどのように表現されているのかを見る。

以下の資料は、所有を意味する upadhi の用例を示した時に用いたものである。

Ud. 3, 10 (p. 33. 11-16):

Upadhiñ hi paṭicca dukkham idaṃ sambhota,<sup>(24)</sup>  
sabbupādānakkhayā natthi dukkhassa sambhavo.  
所有によってこの苦が生じる。  
一切の執着の滅尽により、苦の生起はない。

Lokam imaṃ passa; puthū avijjāya paretā bhūtā bhūtaratā aparimuttā;  
この世間を見なさい。無明に敗れた個々の存在は〔その〕存在を楽しみ、解脱しない。

ye hi keci bhavā sabbadhi sabbatthatāya  
sabbe te bhavā aniccā dukkhā vipariṇāmadhammā



なぜなら、いかなる生存もあらゆる所に、全体に存在し、  
それら全ての生存は無常であり、苦であり、変化する性質であるからである。

ここでは paṭicca を用い、upadhi が苦の原因であることを述べる。この資料は、「無明に敗れた存在がその存在を所有しようとして苦しむ。なぜなら生存は無常だからである。」と解釈することができる。この資料では苦の滅が説かれているが、所有 (upadhi) ではなく執着 (upādāna) が用いられている<sup>(25)</sup>。しかし、対応する梵文資料である Uv. や Mvu. では苦の生起と滅の両方とも、upadhi が用いられている<sup>(26)</sup>。韻律を合わせるために異なった単語を用いた可能性も十分考えられるが、思想的にこの相違がいかなる理由によるものか、ここで考察したい。

内容から見れば、「所有→苦、所有の滅→苦の滅」を表す梵文資料の方が自然であり、理解しやすい。ただ、それによって梵文資料が古形を保っていると決めることはできない。元々ニカーヤのように説かれていたが、後に縁起説が仏教思想の中心となっていく過程で梵文資料が改変されたとも考えられる。いずれにしても、ニカーヤの資料は何らかの意図があって苦の滅についてのみ、執着 (upādāna) を用いたと考えるのが妥当であろう。

この Ud. 3, 10における苦の滅は、「無常 (anicca)、苦 (dukkha)、変化する性質 (vipariṇāmadhamma) である生存を執着しないことにより苦を滅する」ということを表しており、これと同じような内容が他の資料に見られないかを考察することで、苦の滅についてのみ、執着 (upādāna) を用いた理由を推測してみたい。

「無常、苦、変化する性質」という表現は、五蘊などを対象として「無常・苦・無我」を説く散文資料によく見られ<sup>(27)</sup>、韻文資料にはほとんど見られない。Ud. 3, 10と同じように、「無常、苦、変化する性質であるものを執着しない」ということを表す散文資料を以下に挙げる。

SN. 22, 150(Vol. III p. 182. 6-9):

… vipariṇāmadhammam api nu tam anupādāya Etam mama eso ham asmi eso me attā ti samanupasseyyā ti || No hetam bhante ||

「〔無常、苦、〕変化する性質であるもの、それに執着せず (anupādāya)、『これは私のものである。これは私である。これは私の我である。』と観察するだろうか。」「大徳よ、そのようなことはない。」

この資料は、五蘊が無常、苦であることを説明し、最後に「無常、苦、変化する性質であるものを執着しない」ということを述べて、無我を説明している。このように、「無常、苦、変化する性質」という表現は、五蘊や六処という構成要素が無我であることを観察し、苦が滅するということを示すために用いられる。よって、この Ud. 3, 10の資料も「無常、苦、変化する

性質」である生存に執着しないということを説く場合、upadhiではなく、upādānaを用いたと推測できる。

以上のことから Ud. 3, 10 の資料についてまとめる。苦の滅についてのみ upadhiではなく upādānaを用いた理由として、散文資料に説かれるような「無常・苦・無我」との関連が考えられる。すなわち、生存（bhava）が無常（anicca）であり、苦（dukkha）であり、変化する性質（vipariṇāmadhamma）であるので、それを我がものとしなない場合、upadhiよりも無我を説明する資料で用いられる upādāna を使う方が適当であると考えられていたのではないだろうか。

このことは、各支縁起説において、渴愛に条件付けられるものが upadhiではなく upādānaを用いていることにも関連すると考えられる。つまり、三支縁起説では upadhiを用いていたが、対象物が五つや六つの構成要素に分類されるに従って upādānaを使ったと考えられる。用例上、最古層から upadhiが現れることに對し、upādānaは古層から説かれ始める。それに対応しているのか定かではないが、対象物に関する用語も古層から五つや六つに分類され始める<sup>(28)</sup>。

また、upadhiは先述したように、「近くに置く」という意味で、主体と客体は異なっている。例えば、牛飼いは牛を所有したり、所有しようとする。一方、upādānaは自己とは異なるものを我がものにするという意味だけでなく、上述した SN. 22, 150 の用例のように、五取蘊を主な対象物として、自己の身体や自己の存在に執着する場合に用いられること<sup>(29)</sup>が多い。例えば、「執着して（upādāya）、『私が存在する』ということがある」<sup>(30)</sup>や、「彼は色（受・想・行・識）に近づき、執着し（upādiyati）、『私の我である』と確立する。」<sup>(31)</sup>という用例があり、この場合、主体と客体は同一のものである。

以上のことから、各支縁起説において、渴愛に条件付けられるものが upadhiから upādānaへと変化した背景には、対象物の変化があると考えられる。すなわち、対象物が構成要素に分類されるようになったということと、世俗的な対象物を捨て去った出家者達は、そのような対象物よりも自己の身体や自己の存在を問題とするようになったということが考えられる。

以上、古層における苦の原因を見てきた。最古層と比較すれば、苦の原因に多様性が生まれ、また苦の生起と滅の両方を兼ね備えた二支の縁起説と呼べる用例も見られるようになり、三つの連鎖からなる縁起説も見られる。「苦←所有（upadhi）」という関係<sup>(32)</sup>は最古層と同じように、苦の生起のみについて説かれている。

### 2. 3. 三支縁起説の成立過程

古層では、Sn. 742 のように三つの連鎖からなる縁起説が既にいくつか説かれている。よっ

て、本稿で考察する三支縁起説の成立以前に、「A→B→苦」という思想体系は確立していたと言えよう。一方、所有 (upadhi) と苦の関係は、原因を表す単語を用いながら韻文資料に説かれていた。また、世俗的な所有物を意味する upadhi の用例ではあるが、先述したように「諸々の所有物 (upadhi) によって人には憂いがある。実に所有物を離れた者は憂えない。」<sup>(33)</sup> という二支の縁起説と呼べるものが古層に見られ、三支縁起説成立の一端を担っていると考えられる。以上のことから、「苦の原因は所有 (upadhi) である」という最古層で説かれる縁起関係を起点とし、ある段階で upadhi の原因として渴愛 (taṇhā) を設定するに至り、三支縁起説が成立したと考えるのが妥当であろう。しかし、upadhi の前に渴愛を付加する用例はあまり見られず、三支縁起説の具体的な成立過程が明確とならない。本項では、三支縁起説 (渴愛→upadhi→苦) に類似した関係を他の韻文資料から抽出し、試論として具体的な三支縁起説の成立過程を推測してみる。

まず、三支縁起説に最も類似している用例を、古層の韻文資料の中でも比較的古いとされる *Sagāthavagga* の *Māra-saṃyutta* の中から示す。

SN. 4, 1-7 (Vol. I p. 107. 23-26):

Yassa jālinī visattikā taṇhā natthi kuhiñci netave,  
Sabbūpadhinaṃ parikkhayā buddho<sup>(34)</sup> soppati kiṃ tav-ettha mārāti.

いかなる所にも、引き込むための網があり、執着である渴愛がない。

彼は、一切の所有の滅尽により覚り、眠っているのだ。ここであなたに何があるだろうか、悪魔よ。

この資料は、「渴愛の滅→一切の所有の滅→覚り」という三支縁起説の苦の滅を想定させる用例である<sup>(35)</sup>。管見によれば、韻文資料において、三支縁起説を想定させる用例はこれを除いて他には見られない。それに加えて、最古層から古層にかけて「苦←upadhi」が積極的に説かれ、「苦の滅←upadhiの滅」はあまり説かれなことも考慮に入れると、三支縁起説における渴愛は、苦の滅を説くために導入されたのではないかという可能性を指摘することができる。

それでは、なぜ upadhi と苦の関係に渴愛を導入する際、苦の滅に関して付加されたのだろうか。それは、韻文資料に *nidāna* や *paṭicca* を用いて、「苦←upadhi」の関係が明確に説かれているように、upadhi の意味が所有物でも、所有でも、upadhi によって苦があるということは把握しやすいが、upadhi の滅が必ずしも苦の滅を表さない場合があるので、渴愛の滅を導入することによって苦の滅を確かなものとしたのではないだろうか。

つまり、upadhi が所有物を表す場合、牛や子や金、銀などを指すが、それによって苦が生じるということは明白である。しかし、そのような世俗的な所有物を滅することが苦の滅に直

結するとは言い難い。実際、MN. 26 の用例でもブッダが出家する前、upadhi としてまとめられる様々な所有物を求めていたが、それに対して災いを見て出家するという内容であり、upadhi の有無が苦の有無を指しているのではなく、在家と出家の相違を表しているだけである。そこで、upadhi の滅が苦の滅を意味しない用例を以下に示す。

It. 27(p. 21. 4-7):

Yo ca mettaṃ bhāvayati appamāṇaṃ patissato,

Tanu saṃyojanā honti passato upadhikkhayaṃ.

自覚した者は、無量の慈しみを修習する。

彼は所有の滅尽を見ているにもかかわらず、少しの束縛がある。

この資料では、所有の滅尽を見ているにもかかわらず、まだ束縛が残っている様子が説かれている。次の資料は upadhi を離れることが欲界と色界との区別に用いられる表現である。

MN. 64(Vol. I p. 435. 27-31):

Idh' Ānanda bhikkhū upadhivivekā akusalānaṃ dhammānaṃ pahānā sabbaso kāyaduṭṭhullānaṃ paṭippassaddhiyā … paṭhamāṃ jhānaṃ upasampajja viharati.

アーナンダよ、ここに比丘が所有を離れること（upadhiviveka）<sup>(36)</sup>により、不善なる諸現象を捨てることにより、あまねく身体の粗悪さが静まることにより、…初禪に到達し、住する。

以上のことから、所有物や所有の滅が苦の滅を引き起こさない場合があり、苦の滅を確かなものにするために、upadhi の滅の前に渴愛の滅を導入したと推測することができる。そして、縁起説の体裁を整えるために、苦の生起についても渴愛を導入して説くようになったのではないだろうか。また、我がものにしようとする所有欲よりも、その前提となる欲求が重要であるということを示唆する資料を挙げる。

SN. 9, 13(Vol. I p. 204. 7-9):

sukhajivino pure āsuṃ bhikkhū Gotama-sāvaka

anicchā piṇḍam esanā anicchā sayanāsaṇaṃ

loke aniccatāṃ ñatvā dukkhass-antam akaṃsu te

以前、ゴータマの弟子である比丘たちは安楽に生活していた。

彼らは欲さず托鉢食を求め、欲さず寝床や坐を求め、

世間における無常性を知り、苦の終わりを作る。

この資料によれば、比丘たちも所有物を求めることが分かる。重要なことは所有物が無常であることを知り、欲求しないことである。欲求による所有欲に問題があると言える。最古層の資料 (Sn. 872) にも「icchānidānāni pariggahāni, icchāna santyā na mamattam atthi (欲求を因として所有欲があり、欲求が静まることによって我がものとすることがない。)」という用例があるように、欲求<sup>(37)</sup>とそれを我がものにする事とは別の段階として説かれるのである。

## 2. 4. 三支縁起説の解釈

韻文資料を用いて三支縁起説の成立過程を考察してきた。これらの考察を念頭に置き、散文資料における三支縁起説を見ていく。

SN. 12, 66(Vol. II p. 109. 6-15):

Ye hi keci bhikkhave atītam addhānam samaṇā vā brāhmaṇā vā yaṃ loke piyarūpaṃ  
sātarūpaṃ taṃ nīcato addakkhuṃ sukhato addakkhuṃ attato addakkhuṃ ārogyato  
addakkhuṃ khemato addakkhuṃ te taṇhaṃ vaḍḍhesuṃ || ||

Ye taṇhaṃ vaḍḍhesuṃ te upadhiṃ vaḍḍhesuṃ || ye upadhiṃ vaḍḍhesuṃ te dukkhaṃ  
vaḍḍhesuṃ || ye dukkhaṃ vaḍḍhesuṃ te na parimuccimṣu jātiyā jarāmaraṇena sokehi  
paridevehi dukkhehi domanassehi upāyāsehi na parimuccimṣu dukkhasmā ti vadāmi  
|| || …

比丘たちよ、過去世においていかなる沙門やバラモンたちも、世間における愛すべきものや快きものを常として見た。楽として見た。我として見た。健康として見た。安穩として見た。

彼らは渴愛を増大させた。渴愛を増大させた彼らは、所有を増大させた。所有を増大させた彼らは、苦を増大させた。苦を増大させた彼らは、生・老・死・憂い、悲しみ、苦しみ、落胆、悩みから解脱せず、苦から解脱しないと、私は説く。…

この三支縁起説の意味を考えると、「所有物（世間における愛すべきもの (piyarūpa) や快きもの (sātarūpa)）に対して無知であるため、それに対する渴愛 (taṇhā) が増大し、その所有物を所有しようとし (upadhi)、あるいは実際に所有し、苦しむ。」と解釈すべきではないだろうか<sup>(38)</sup>。

三支縁起説が最古層や古層の韻文資料の影響を受けて成立したとするならば、以上のような解釈がふさわしいと言えよう。しかし、その解釈は徐々に変遷を経たとも考えられる。なぜなら、註釈がこの三支縁起説の upadhi を五 (取) 蘊 (khandhapañcaka) と解釈していることから判断できるからである<sup>(39)</sup>。すなわち、三支縁起説を渴愛→五蘊→苦と考えている。upadhi

の用例でも挙げたように、僅かではあるが、初期經典中にそれを示す用例も見られるので、その可能性も考慮すべきである<sup>(40)</sup>。その場合、次の SN. 1, 4-4 の資料が三支縁起説の註釈に影響を及ぼした可能性がある。

SN. 1, 4-4(Vol. I p. 22. 21-23):

Chandajam agham chandajam dukkham  
chandavinayā aghavinayo aghavinayā dukkhavinayo

苦痛は意欲から生じ、苦は意欲から生じる。

意欲の除去により苦痛の除去がある。苦痛の除去により苦の除去がある。

この資料は、意欲 (chanda) → 苦痛 (agha)、意欲 → 苦 (dukkha)、意欲の滅 → 苦痛の滅 → 苦の滅を表しており、chanda → agha → dukkha の関係を見出すことができる。この資料に対する註釈<sup>(41)</sup>は、chanda = 渴愛、agha = 五蘊と解釈し、三支縁起説の註釈と同じ解釈を採っている。他の韻文資料の中に、agha が五蘊と関連する用例<sup>(42)</sup>も見られ、散文資料にも苦痛 (agha) = 五蘊、苦痛の根本 (aghamūla) = 渴愛を示す用例<sup>(43)</sup>も見られるので、この資料との関連から三支縁起説を渴愛 → 五蘊 → 苦と解釈するに至ったのかもしれない<sup>(44)</sup>。

### 3. 結論

三支縁起説の成立について、upadhi の用例を通して考察した。結論を以下にまとめる。

- (1) upadhi は upa-√dhā からなる名詞であり、「近くに置く」という意味から「所有物」と「所有」という二種類の訳語を想定するべきである。
- (2) 最古層に説かれる苦の原因は、ある対象物を我がものとしたり、執着したりすることを挙げており、苦の原因としての upadhi も所有を意味していると考えられるべきである。
- (3) 古層では、苦の原因に多様性が生まれ、二支の縁起説と呼べる用例も見られるようになり、三つの連鎖からなる縁起説も見られる。「苦 ← 所有 (upadhi)」という関係は最古層と同じように、苦の生起のみについて説かれている。また、「所有物 (upadhi) → 憂い、所有物の滅 → 憂いの滅」という upadhi と苦からなる二支の縁起説と呼べるものも存在する。
- (4) 古層における三支縁起説に類似した用例を示し、三支縁起説における渴愛は苦の滅を説くために導入された可能性を指摘した。また、その理由は upadhi の滅が必ずしも苦の滅に直結する訳ではなく、渴愛の滅を導入することにより、苦の滅を確かなものにしようとしたからであると推測した。
- (5) upadhi を五蘊と解して、三支縁起説を渴愛 → 五蘊 → 苦と考える解釈が註釈に見られるが、三支縁起説の upadhi は元来、所有を表していたとすべきである。



【略号と先行研究】

- |       |  |
|-------|--|
| AN.   | <i>Āṅuttara-Nikāya</i> . PTS                               |
| Dhp.  | <i>Dhammapada</i> . PTS                                    |
| DN.   | <i>Dīgha-Nikāya</i> . PTS                                  |
| It.   | <i>Itivuttaka</i> . PTS                                    |
| Jā.   | <i>Jātaka</i> . PTS  |
| MahN. | <i>Mahāniddesa</i> . PTS                                   |
| MN.   | <i>Majjhima-Nikāya</i> . PTS                               |
| Mvu.  | E Senart. <i>Mahāvastu</i> . 3vols. Paris. 1882-1897       |
| SĀc.  | 求那跋陀羅譯『雜阿含經』T02(No.99)                                     |
| SN.   | <i>Samyutta-Nikāya</i> . PTS                               |
| Sn.   | <i>Suttanipāta</i> . PTS                                   |
| SN-a. | <i>Samyuttanikāya-Aṭṭhakathā (Sāratthappakāsini)</i> . PTS |
| T     | 大正新脩大藏經  |
| Th.   | <i>Theragāthā</i> . PTS                                    |
| Thī.  | <i>Therīgāthā</i> . PTS                                    |
| Ud.   | <i>Udāna</i> . PTS   |
| Ud-a. | <i>Udāna-Aṭṭhakathā (Paramattha-Dīpanī)</i> . PTS          |
| Uv.   | Franz Bernhard ed. <i>Udānavarga</i> . Göttingen. 1965     |
| Vin.  | <i>Vinaya</i> . PTS  |
- 
- Bhattacharya [1968] Kamaleswar, Bhattacharya. “Upadhi-, Upādi- et Upādāna- dans le Canon bouddhique pāli” *Mélanges d’Indianisme (a la mémoire de Louis Renou)*. Paris. 1968. pp. 81-95
- Bodhi [2000] Bodhi, Bhikkhu. *The Connected Discourses of the Buddha : A New Translation of the Samyutta Nikāya*. Wisdom Publications. 2000
- 荒牧典俊 [1988] 荒牧典俊. 「ゴータマ・ブツダの根本思想」『岩波講座東洋思想第八卷インド仏教1』岩波書店. 1988. pp. 61-98
- 並川孝儀 [2010] 並川孝儀. 『構築された仏教思想 ゴータマ・ブツダ―縁起という「苦の生滅システム」の源泉』佼成出版社. 2010
- バッタチャルヤ[1985] K. バッタチャルヤ. 「パーリ仏教正典における upadhi, upādi, upādāna」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』. 24. 1985. pp. 22-37
- 服部弘瑞 [2011] 服部弘瑞. 『原始仏教に於ける涅槃の研究』山喜房佛書林. 2011
- 舟橋一哉 [1952] 舟橋一哉. 『原始仏教思想の研究―縁起の構造とその実践』法蔵館.



1952

宮本正尊 [1975] 宮本正尊. 「縁起説の一考察 -upadhi- をめぐって」『印度学仏教学研究』23-2. 1975. pp. 723-727

〔注〕

- (1) 舟橋一哉 [1952: pp. 70-71] は、十二支縁起説が初めにあり、その他の縁起説は省略系であると述べる。
- (2) upadhi に関する先行研究は、Bhattacharya [1968] (和訳: バッタチャルヤ [1985]), 宮本正尊 [1975] などが挙げられる。
- (3) upadhi の諸訳については、服部弘瑞 [2011: pp. 377-386] が詳しい。
- (4) 宮本正尊 [1975]
- (5) SN-a. 1, 2-2 (Vol. I pp. 31-32) では、upadhi に kāma-upadhi, khandha-upadhi, kilesa-upadhi, abhisāṅkhāra-upadhi の四種類があること、そしてここでの upadhi は kāma-upadhi を意味することを述べている。
- (6) Thi. 18, 163, 301 Th. 512
- (7) SN. 4, 2-10 (Vol. I p. 117) では、upadhi が黄金の山を指していると考えられる。
- (8) アルダマーガディー語では uvahi が upadhi に対応している。Cf. *Uttarādhyaṇasūtra*. 12, 4; 24, 11
- (9) PTS は sassar iva となっており意味を把握しがたい。したがって、ビルマ第六結集版に従う。
- (10) ウルヴェーラ・カッサパに関する偈である Th. 378には、以前祭祀によって満足しており、欲望の領域を好んでいたことが説かれている。
- (11) SN. 22, 43, 94 SN. 35, 13
- (12) 南伝資料には見られないが、北伝資料には upadhi-vāraka (vārika) という複合語があり、「所有物を管理する者」という意味で用いられ、この upadhi も所有物を表している。Cf. F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary* p. 136
- (13) PTS は、na upadhī hi paṭicca dukkhaṃ idaṃ sambhoti であり意味を把握しづらい。また、平行句を参考にしてもこのように訂正するべきである。したがって、ビルマ第六結集版に従う。
- (14) DN. 14 (Vol. II p. 36) MN. 22 (Vol. I p. 136) SN. 6, 1-1 (Vol. I p. 136) AN. 3, 32 (Vol. I p. 133)
- (15) SĀc. 1023 (T02. 267a)
- (16) Sn. 1094
- (17) 荒牧典俊 [1988: p. 79] は、ジャイナ古経において様々な対象存在を所有することを意味していた語である upadhi が、ここでは「とくに個体存在を所有すること」を意味すると述べる。
- (18) 最古層の資料では、「争闘」(Sn. 862-877) という経典に nidāna が多く用いられ、争闘をテーマにして因果関係が説かれている。最古層では、原因を表す単語としてこの nidāna が最もよ

く用いられる。

- (19) Sn. (pp. 139-149)
- (20) 原因を表す語に関して、最古層では見られなかった *paccaya* が多く用いられている。
- (21) Cf. 並川孝儀 [2010: p. 81]
- (22) Dh. 212-216 は、憂い (*soka*) の原因として *piya*, *pema*, *rati*, *kāma*, *taṇhā* を挙げている。
- (23) SN. 1, 4-4 (Vol. I p. 22) Sn. 36
- (24) ビルマ第六結集版に従う。
- (25) Ud-a. 3, 10 (p. 213) には、*upadhi* の内容と *upādāna* の内容に関して説かれているが、なぜ苦の滅についてのみ *upādāna* を用いたかについては言及されていない。
- (26) Uv. 32, 37-38 Mvu. (Vol. II p. 418)
- (27) MN. 22 (Vol. I p. 138) SN. 22, 49 (Vol. III p. 49) SN. 22, 59 (Vol. III p. 67)
- (28) 古層には「六つに執着して (*upādāya*)」(Sn. 169) という用例も見られる。
- (29) 最古層の資料 (Sn. 915-916) にも、「どのように見て、執着しない者が (*anupādiyāno*) 涅槃するのか？」と問われ、「『私が存在する』という全て〔の誤った見方〕を考えて、抑止すべきである。」と答える用例がある。
- (30) SN. 22, 83 (Vol. III p. 105)
- (31) SN. 22, 85 (Vol. III p. 114)
- (32) MN. 116 (Vol. III p. 70) の韻文資料には、*upadhi* が苦の根本 (*dukkhamūla*) として扱われている。
- (33) SN. 1, 2-2 (Vol. I p. 6)
- (34) 異本に従い、このように訂正する。
- (35) 梵文資料にも、これに類似した用例が見られる。Cf. Uv. 30, 33
- (36) MahN. 772 (p. 27) では *upadhiviveka* が不死の涅槃と同義であることを説いており、MN. 64 の用例と内容が異なる。
- (37) *icchā* と *taṇhā* とは異なる単語であるが非常に類似した単語であると考えられる。なぜなら、Sn. 339 には「衣、托鉢食、寝床や坐に対する渴愛 (*taṇhā*) を作ってはならない。」ということが説かれており、ここでの *taṇhā* は対象物に目を向ければ、SN. 9, 13 に説かれる *icchā* と類似しているからである。また、「渴愛 (*taṇhā*) を根こそぎ断ちきり、何を求めること (*pariyesanā*) に至るのか。」(Ud. 7, 9) や、「渴愛 (*taṇhā*) の滅により解脱した者にとって、求めること (*esana*) は捨てられた。」(It. 55) のように、SN. 9, 13 に説かれる *icchā* が *taṇhā* に取って代わったような用例も見られるからである。
- (38) それを示しているのが、三支縁起説が説かれた後の比喻である。要約すると、「暑さで苦しみ、のどがからからで (*tasita*) 渴いた者 (*pipāsita*) (渴愛) が、見栄えよく、香りよく、味よく、しかし毒と混ざった飲み物を飲み (所有)、そのために死に至り苦しむ (苦)。」というもので、三支縁起説をよく表していると言えよう。

- (39) SN-a. 12, 66(Vol. II p. 119)
- (40) 宮本正尊 [1975] や Bodhi [2000: p. 780] は、三支縁起説の upadhi は執着と五蘊、両方の意味を含んでいると考えている。
- (41) SN-a. 1, 4-4(Vol. I pp. 62-63)
- (42) SN. 5, 9(Vol. I p. 134)
- (43) SN. 22, 31(Vol. III p. 32)
- (44) 但し、初期經典中に agha=upadhi を証明できるような資料は見当たらず、この資料が構築された段階で三支縁起説と同じ内容を表していたとは考えにくい。

(からい たかのり 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教員：並川 孝儀 教授)

2014年 9 月29日受理